

## ローブ・ヴォラントの衣服構造と縫製方法

— 復元製作による考察 —

太田 蓉子  
村田 仁代  
北尾 和信

### 要旨

この度、神戸ファッション美術館との学館協働事業の一環として、18 世紀初期・ロココ初期の宮廷衣裳ローブ・ヴォラントを借用することができた。実物を手に取って間近に観察し測定する機会を得て、このローブの再現を目指す復元品の製作を試みた。

本研究は、ローブ・ヴォラントの復元製作をもとにして、ローブの形状と構造および縫製の仕方を明らかにしたものである。さらに、「ロココの華」と言われるローブ・ア・ラ・フランセーズへと形状が移行する過程、および当時の服作りに対する考え方や衣服製作の技術と方法を探ることを目的としている。

### はじめに

ローブ・ヴォラント (Robe Volante、または Robe Battante) は、ルイ 15 世の幼年期・摂政時代 (1715—23 年) に登場し、流行した宮廷衣裳である。その名の示す通り「風に翻る」、ガウン型のドレス (英 Sack Gown または Sack Dress) であった。ローブの背面には数本のプリーツがたたまれ、その布襞が前面の肩襞とともに裾へと広がり、身体の動きに連れて揺らめくのである。これを着た女性を、画家アントワーヌ・ヴァトー (1684—1721) がその絵の中に美しく描いたことから、「ヴァトー・ローブ」「ヴァトー・プリーツ」とも呼ばれた。ゆったりとしたローブは大いに人気を博したが、やがて、背面のプリーツをより整えて揺らめかすと共に、胴体部は身体に添わせるようになる。前面に多彩な装飾も施すようになり、「ローブ・ア・ラ・フランセーズ」と呼ばれるようになるローブへと移行する。

ローブ・ヴォラントは、ロココ服飾の魁となったものであるが、このローブの形状と構造についての研究は、殆ど見られない。ローブ・ア・ラ・フランセーズとの形態的区別をしていないものもあり<sup>1)</sup>、その形状を示すパターン図は、管見によるとノーラ・ウォー<sup>2)</sup> が描いたものがあるのみである。しかし、そこにも細部にわたる衣服構造と縫製については明らかにされていない。

本研究のもとになるローブの実製作については、ドレスのレプリカ製作法に関連する文献は見つからず<sup>3)</sup>、試行錯誤の状態であったが、10 ヶ月間にわたり、綿密な観察と測定を行い、試作を繰り返して、その形状と構造を忠実に模したレプリカを製作することができた。さらに、布地や模

様についても出来る限り実物に近いものを追求し、用いられているのと同じ縫い技法に従って縫製する、復元的レプリカの製作（復元製作と呼ぶ）を行った。

## 1. ロープの製作年代

復元に用いたローブは、全体の形状としては、前面、背面ともに肩部からさらに脇部からプリーツがゆったりと裾へ流れる円錐形に近い立体形に造形されている。ゆったりとしたガウン型のローブである。1740年代以降のローブに見られるように、前身ごろウエストあたりにダーツや切り替え線をいれて胴体部を身体に添わせることはしていない。しかし、袖やカフスは、ヴァターの絵に見られるようなゆったりとしたものではなく、袖は腕の形に合わせて細身になっており、カフスはラケット型に形成されて袖口の肘後方に飛び出している。このような形状のローブは、先述したノーラ・ウォーのパターン図 (Diagram)・ローブ・バタント 1725-35<sup>4)</sup>の他に、ジャネット・アーノルドの英国婦人衣裳のアウトライン・1720-30年の図<sup>5)</sup>、およびフランス服飾芸術協会所蔵の1730年頃とされるローブ・ヴォラントの写真<sup>6)</sup>に見られた。さらに、18世紀のロココ絵画や布地が大きな花柄の絹織物製であることを参考にした。当ローブは、1730年前後に製作されたものと推察する。

## 2. 復元製作の方法

先ず、復元製作の過程と方法について、その概要を記す。

### I 材料について

- ・ 用いられている布地の材質、織り方、模様についての観察と調査
- ・ 復元製作に用いる材料の検討
- ・ 表地模様の復元方法

### II 形状と構造について

- ①ローブ各部位の名称を定める
- ②寸法測定の方法を検討する
  - ・ 測定器具、操作方法について定める
  - ・ 布幅の確定
  - ・ 測定のための基準線と基準点をローブ布上に設定する
- ③実測値をもとに右左各部位の形状を描く
- ④パターン作成の方法を検討する
  - ・ 実測形状をもとに、平面製図による作成
  - ・ ドレーピングによる作成
  - ・ 試作による各部形状の確定および縫合線と合印の確認
  - ・ 縫い代、折り代の設定
  - ・ トワール製作による全体像の確認
- ⑤パターン図を描く
  - ・ 仕上がりパターン
  - ・ 裁ち切りパターン
  - ・ 芯パターン

### III 縫製方法について

#### ①原品における縫製の方法

- ・ 原品における裁断の方法—裁断時の形状、柄合わせとパターン配置などを考察する。
- ・ 原品における縫合の縫い目を観察し、試し縫いも行い、縫い技法を明らかにする。

#### ②復元製作における縫製の方法

- ・ 柄合わせとパターン配置、印し付け
- ・ 縫合の仕方—縫い技法と縫い順序

以上の事項についての内容の詳細は、主に、冊子「ローブ・ヴォラントの復元製作」<sup>7)</sup>に記している。冊子は、今回の復元製作の記録として、また今後のレプリカ製作の参考となるように配慮して作成したものである。

本論は、ローブ本来の構造と縫製の仕方を探求することを主眼とする立場から、上記の冊子では省略した考察部分を主体に記述するものである。

### 3. ローブの形状と構造の考察

#### ●各部位の名称

ローブを構成する布同士の縫合線で、各部位に分け、それぞれに名称を定めた。

各部位において、プリーツなど形態上重要な部分の呼称を定めた。

背面—後身ごろ中央	背面プリーツ
—後身ごろ脇	背面プリーツ（後肩ひだを含む）
	後脇プリーツ
前面—前身ごろ	ネックひだ、前肩ひだ
	前脇プリーツ
側面—後まち	スラッシュあき
—前まち大	スラッシュあき
—前まち小	
袖部—袖	袖山タック
—カフス	前タック、後タック
後ネックライン	
—ネックパネル	

#### ○芯地が付く部位と芯の名称

後身ごろ肩部、後脇プリーツ部	—後身ごろ芯
前身ごろ肩部、前脇プリーツ部	—前身ごろ芯上、前身ごろ芯下
袖	—袖芯
カフス	—カフス芯、カフス補強芯
前身ごろストマッカー付け位置	—前中心芯、前身ごろ付属芯

(1) 実測値より描いたローブの左右各部位の形状

寸法測定の方法は、「ローブ・ヴォラントの復元製作」<sup>7)</sup>に記載した方法による。

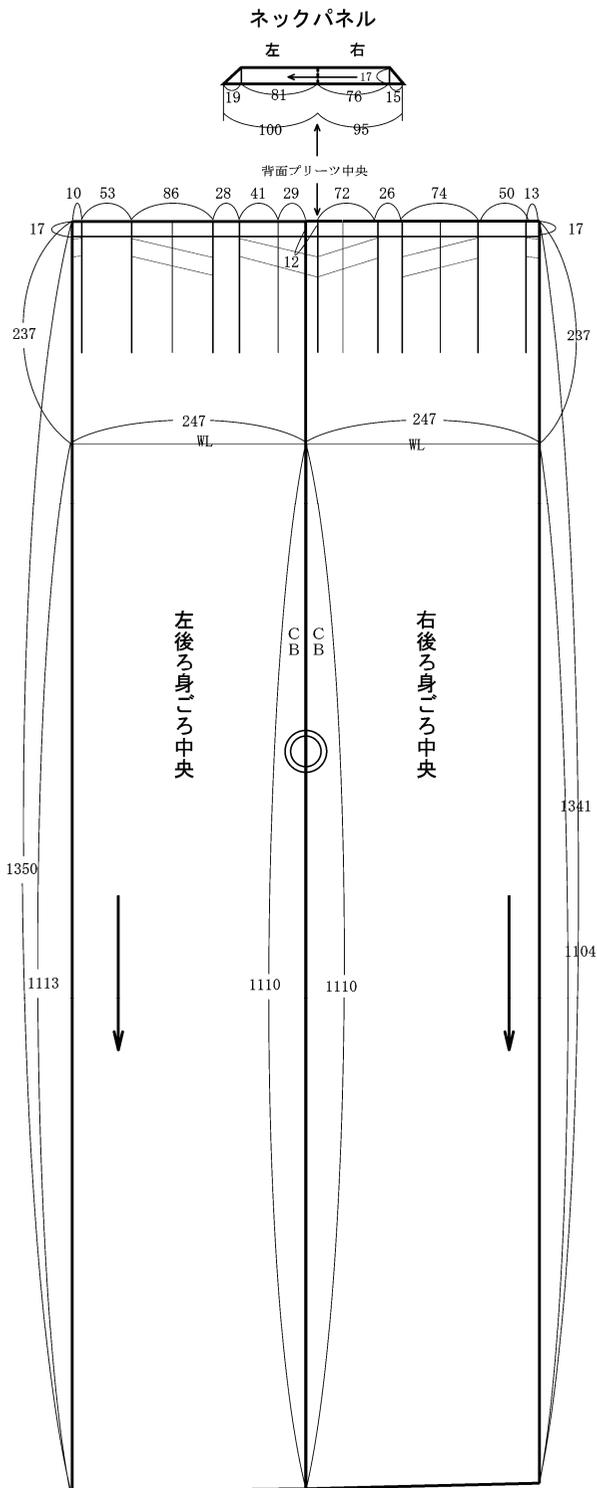
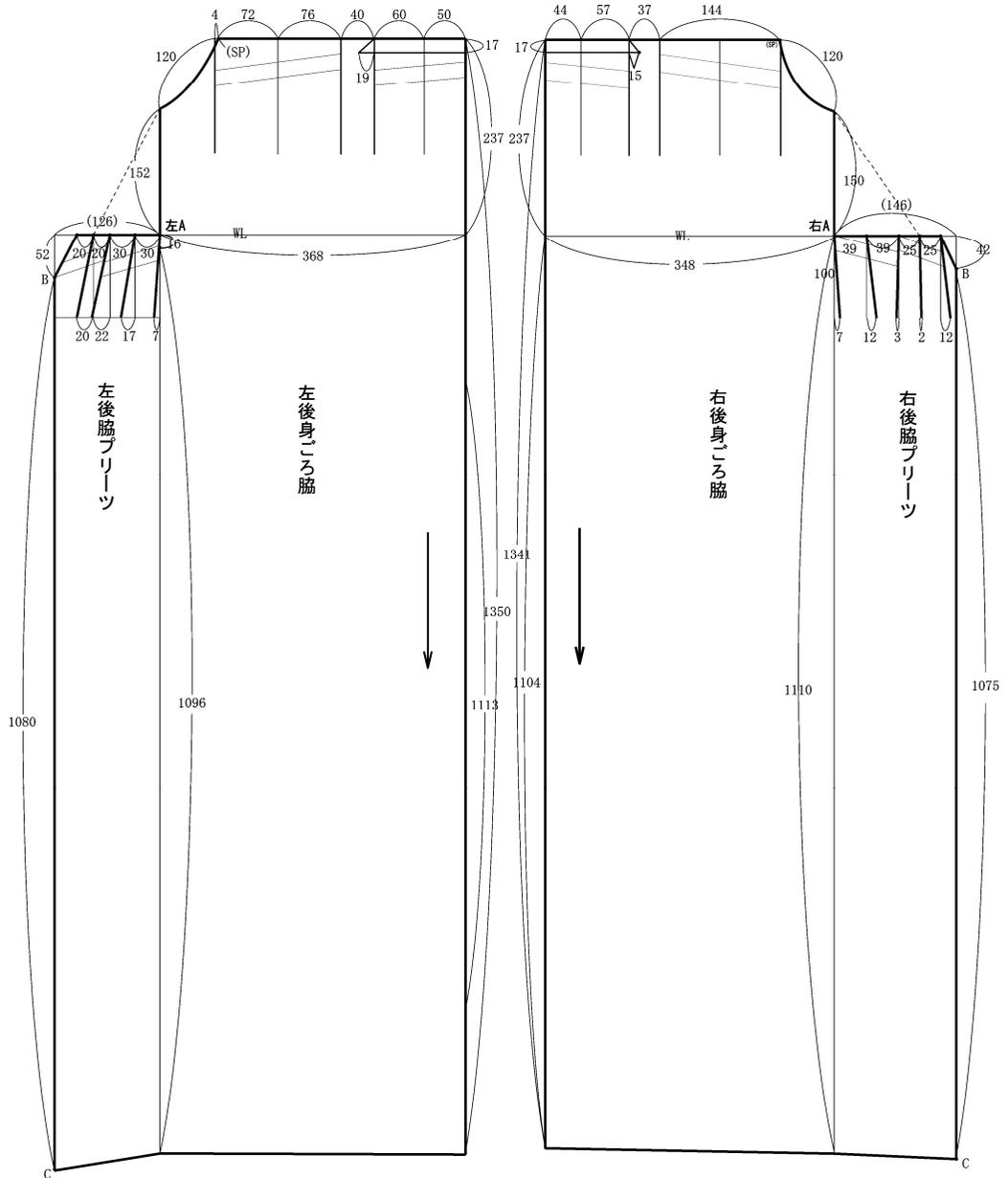


図 (1) - 1

単位 mm



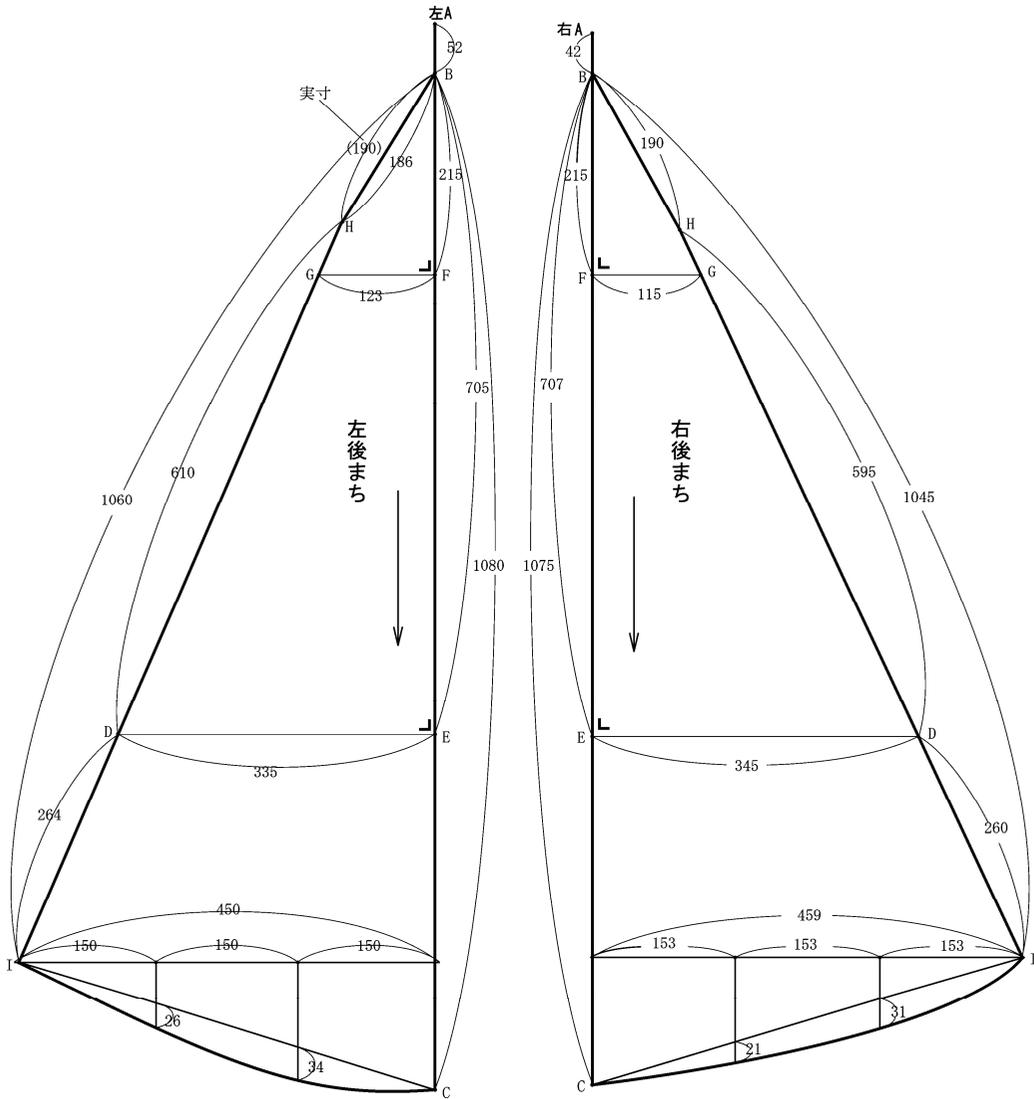
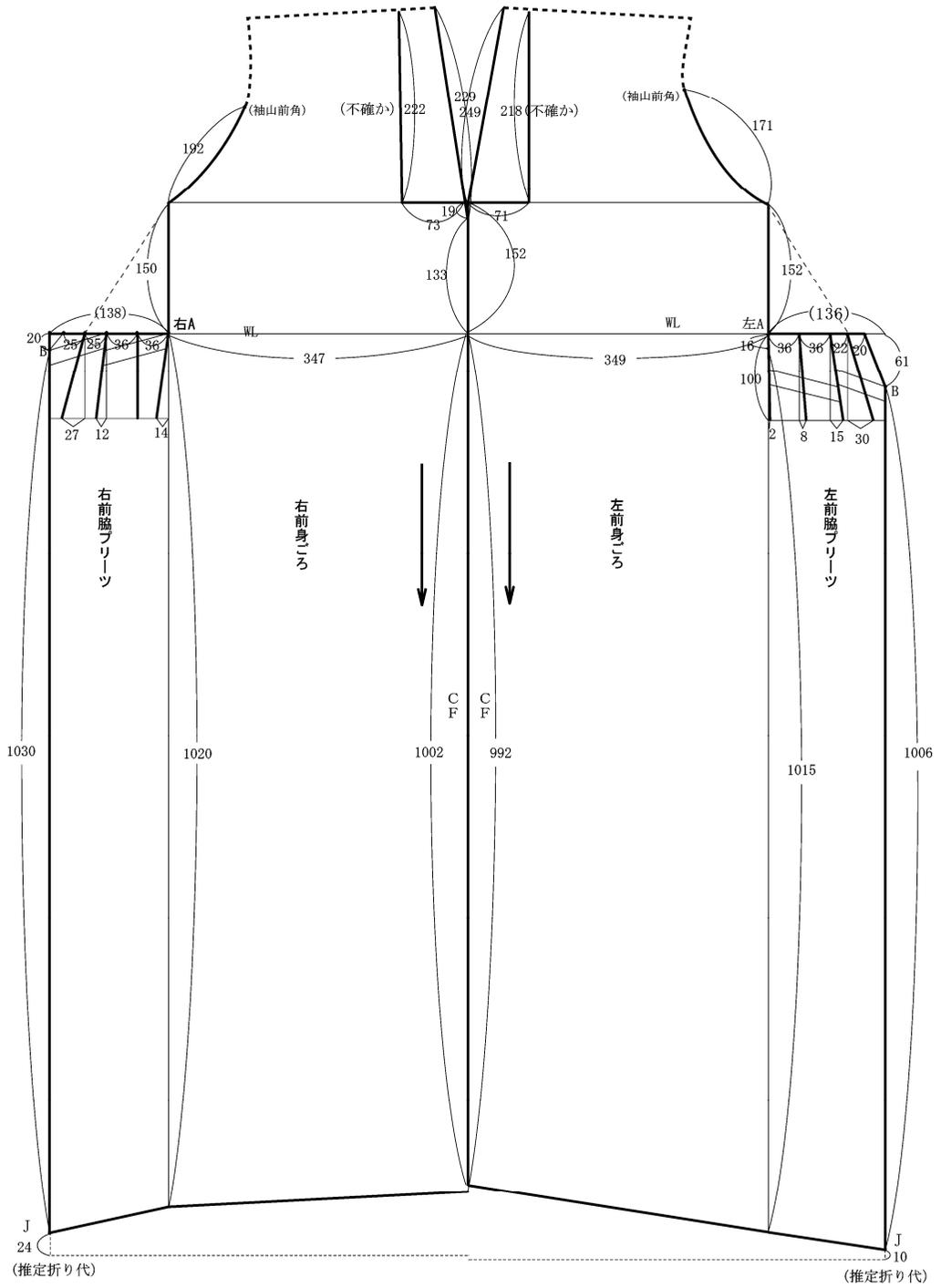
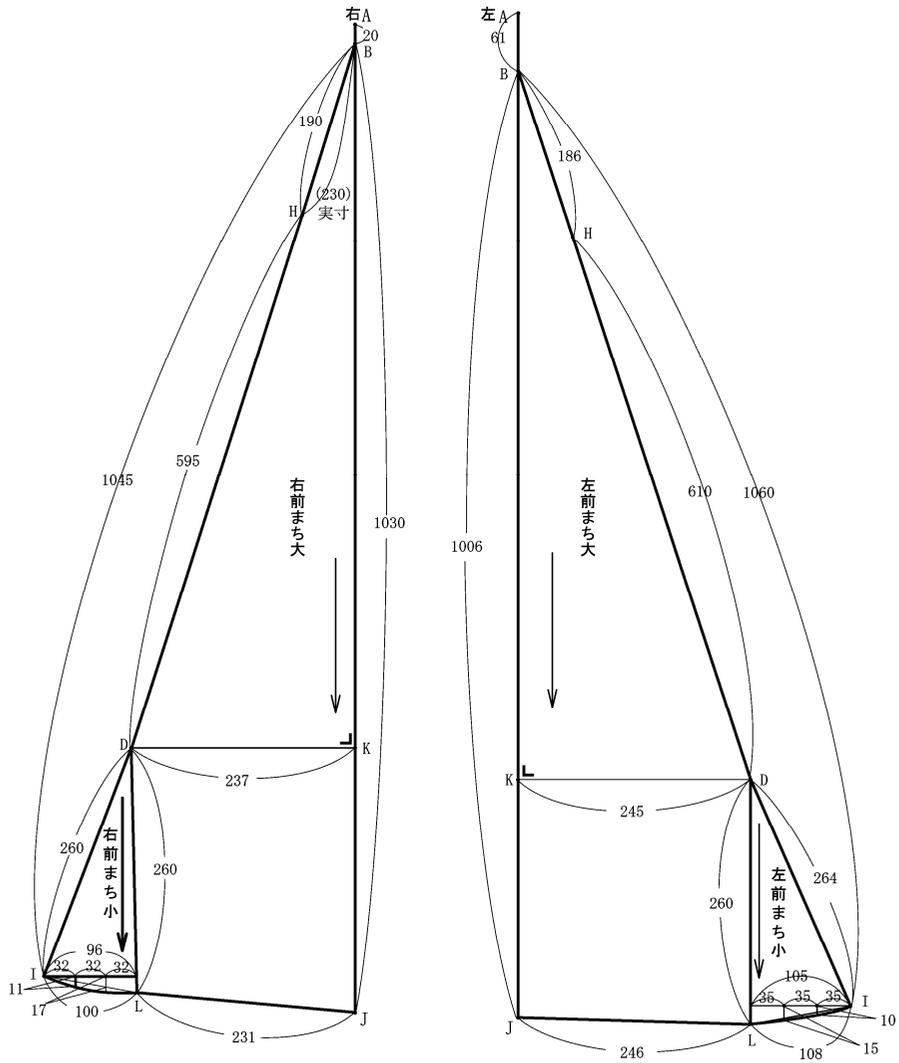
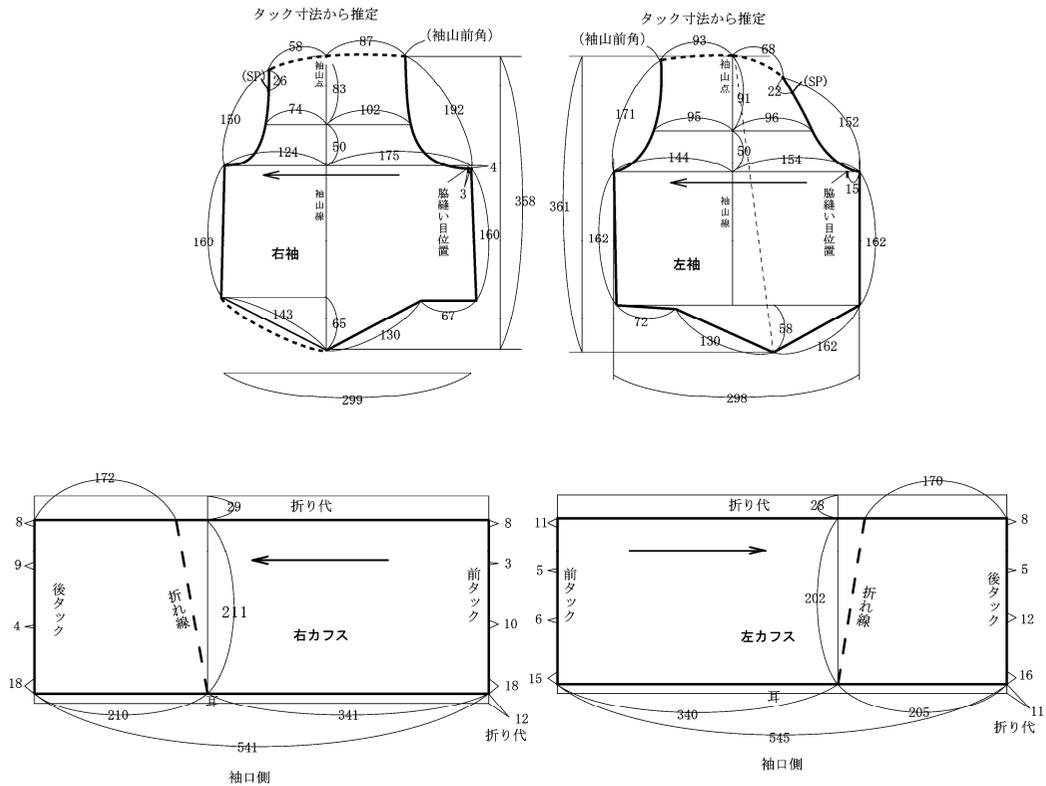


図 (1) - 4







●ローブの左右で実測形状が異なる原因を考える

・先ず原因として考えられる事柄を列記する。

a.裁断による違い

a-1.裁断寸法の間違い

a-2.パターン配列による布地の節約のため形状変更

b.印しつけによる違い

b-1.印し位置の寸法間違い

b-2.着用者の体形に合わせた

b-3.外見のみでの印しつけ

b-4.着用状態でのピンによる接合の不具合

c.縫合作業による違い

c-1.縫い合わせ時の布のズレ、縫い糸の引っ張り加減

c-2.プリーツのたたみ方 (芯地の据え方不具合を含む)、止め方

c-3.印しを付けていない箇所を目分量で縫合

#### d.経年と着用による変形

d-1.布の伸び、ねじれ、クタビレ（張り、腰などの低下）による変形

d-2.縫い目の伸び、ほころび、修理による変形

#### ・原因の特定

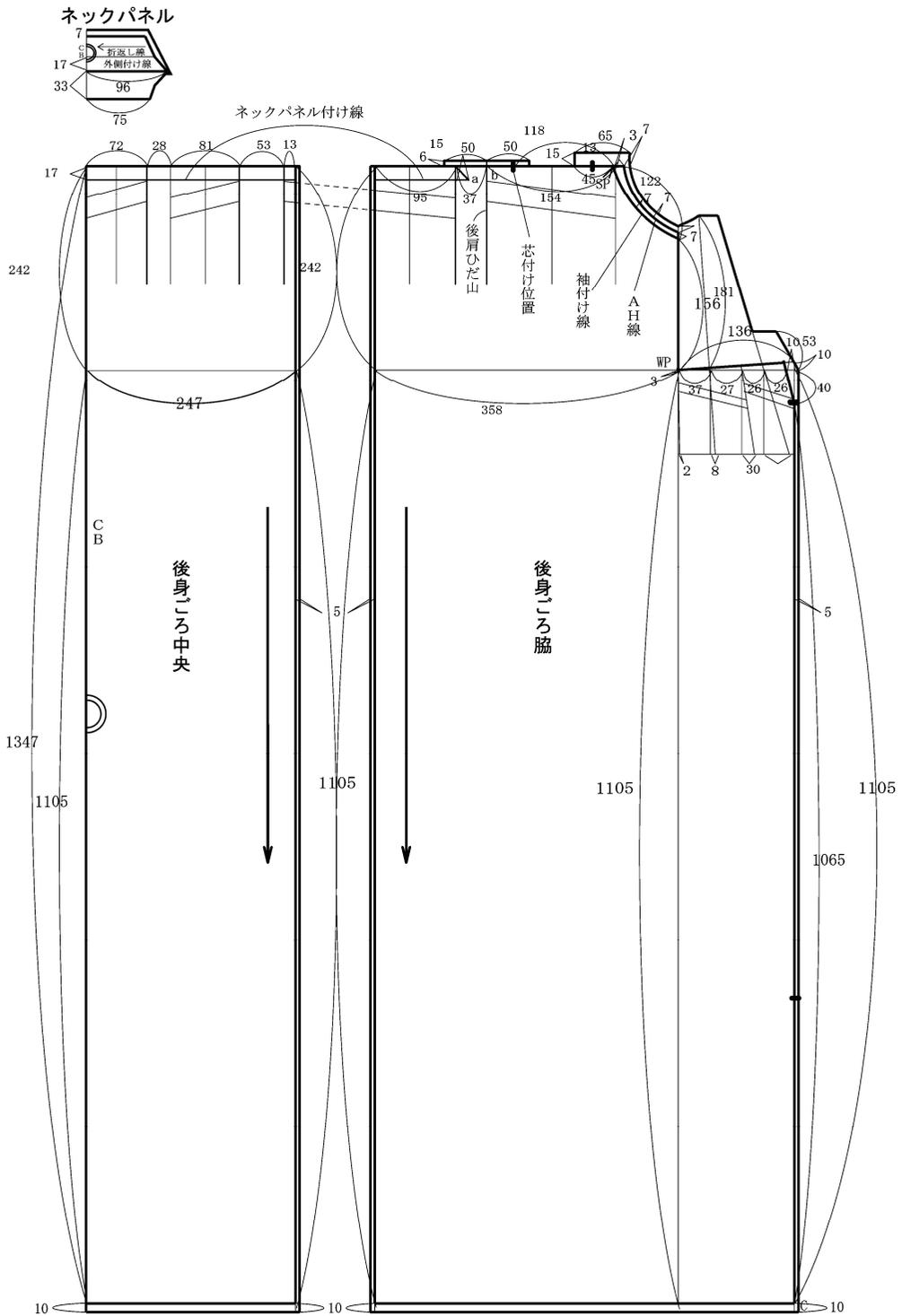
復元製作を行う過程で、それぞれの部分において左右の差異が何故生じたのかを考えた。原因はそれぞれの部分によって多少異なるが、大きな左右の形状差が見られた身ごろのプリーツ部、まち付け位置とスラッシュあき、まちの形状（ここには d-1.による変形も加わる）、袖と袖付け、においては、原因が裁断後の縫製の仕方にあること、中でも b-3.4.および c-2.3.にあることが分かった。つまり、布地裁断後に行うスタイル形成のやり方に因り生じたものである。言い換えれば、ローブの左右形状の差異は、このローブの縫製の仕方を語っていたのである。原因の詳細は、4. 縫製方法の考察において述べる。

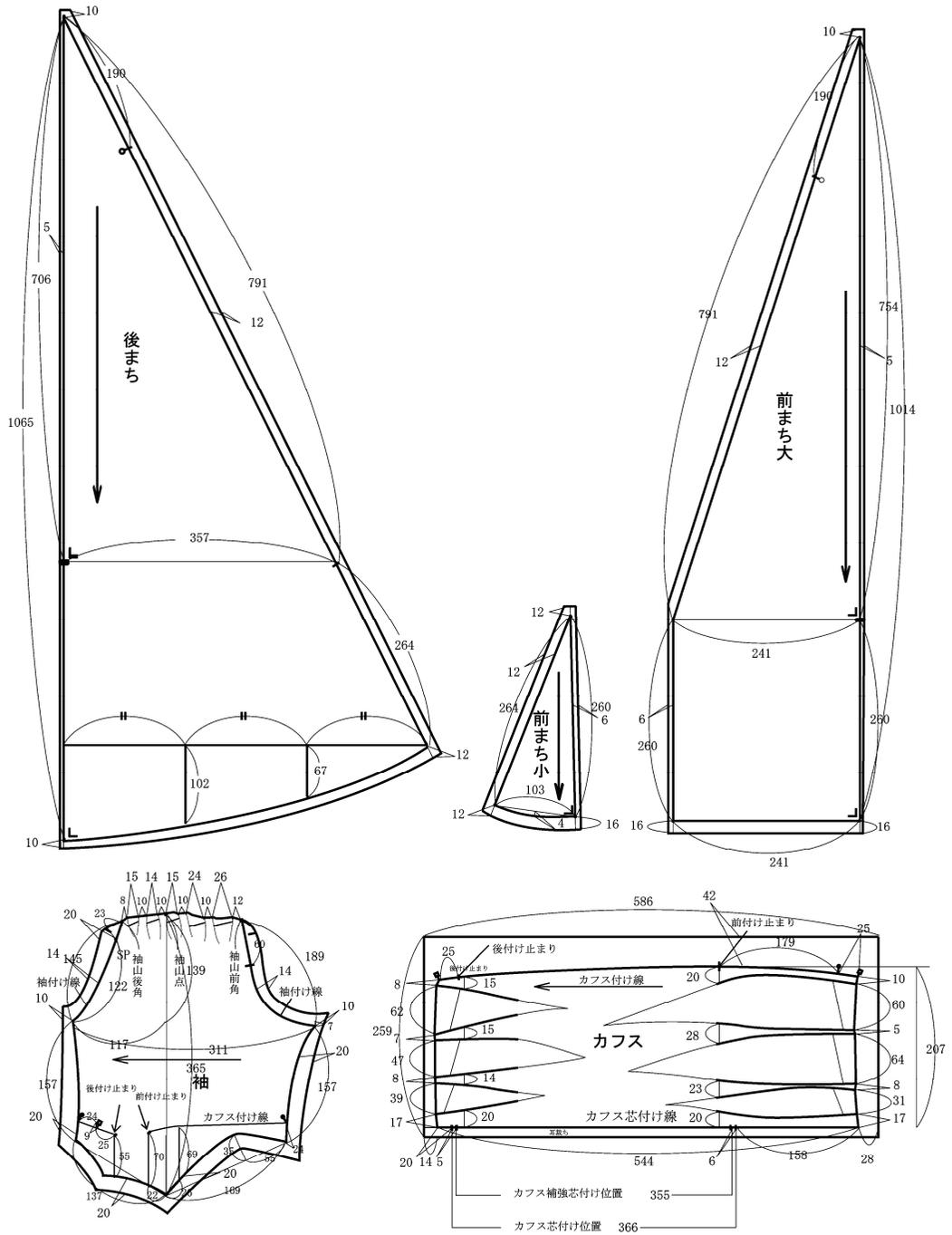
## (2) スタイル形成の構図

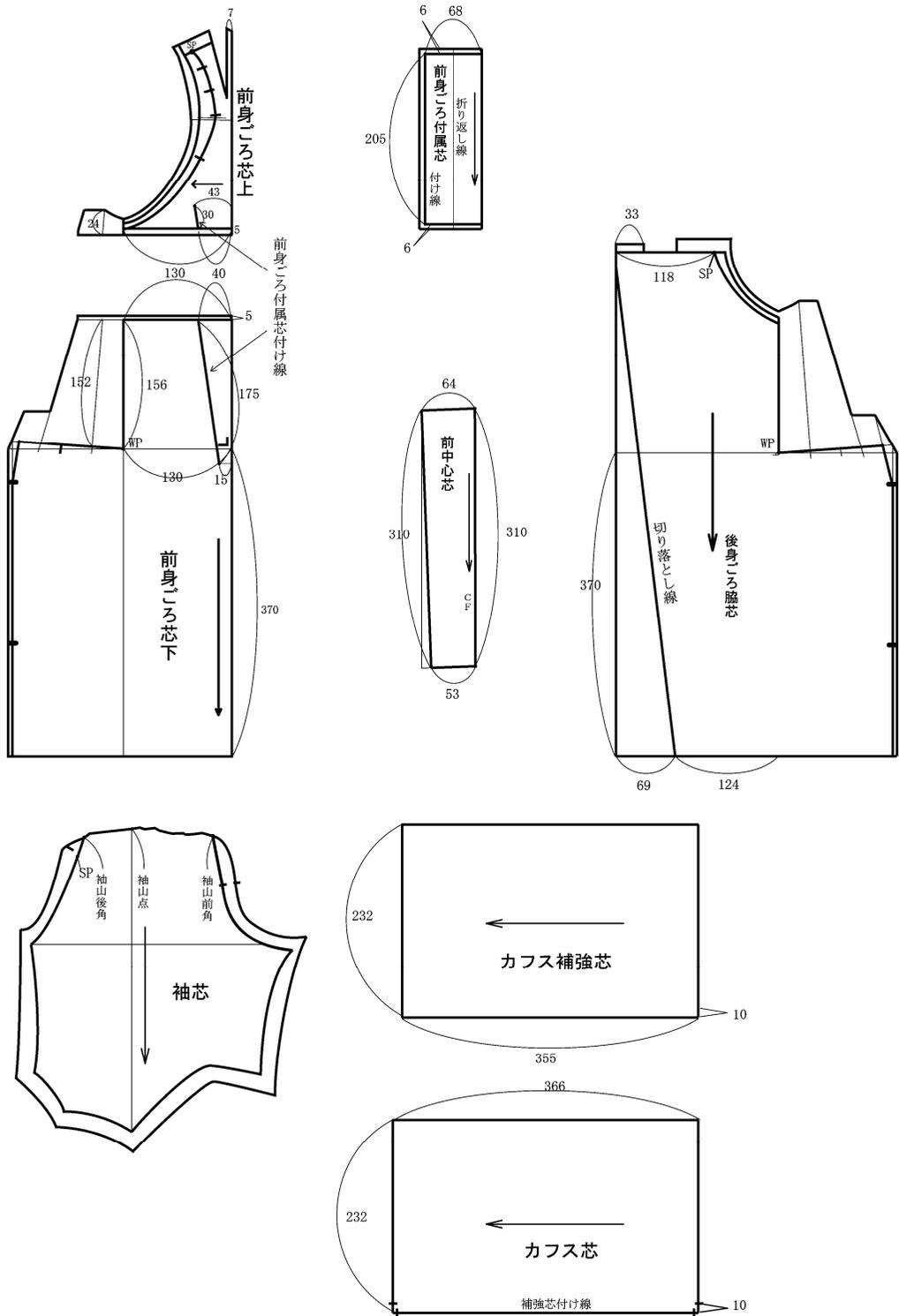
ローブ・ヴォラントは、冒頭に述べたように、随所に設けられたプリーツの布襷の揺らめきと陰影の美しさが人々に愛でられたものである。それは、その美しさを表現してみせたローブのスタイル形成が人々を魅了したことに他ならない。復元製作においては、このスタイル形成の構想を今に引き継ぎ、それを今に再現することに努めた。

復元製作のためのパターン作成は、ローブが平面的に構成されている部分は、先に記した実測値をもとに、原則として左右の平均値を採用し、まちの形状などを調整したものである。一続きの立体形になっている前後身ごろの肩部と袖付け、袖口とカフスは、寸法測定が困難であり測定値は不確かである。そこで、この部分は、縫合形態の整っているローブの右側で、部位毎に部分に分けてトワルを当ててドレーピングを行い、試作し、調整してパターン化した。（詳細は、「ローブ・ヴォラントの復元製作」<sup>7)</sup>『パターン作成の方法』に記す。）さらに、全体をトワル（トワル芯も据える）で試作し、縫合形態の確認とともに、このスタイルが表わす衣裳観をイメージできる構成図であるのかをも確認した。つまり、このローブのスタイルが語りかける思いや、意図した形状と構造を再現するための設計図を作成したのである。









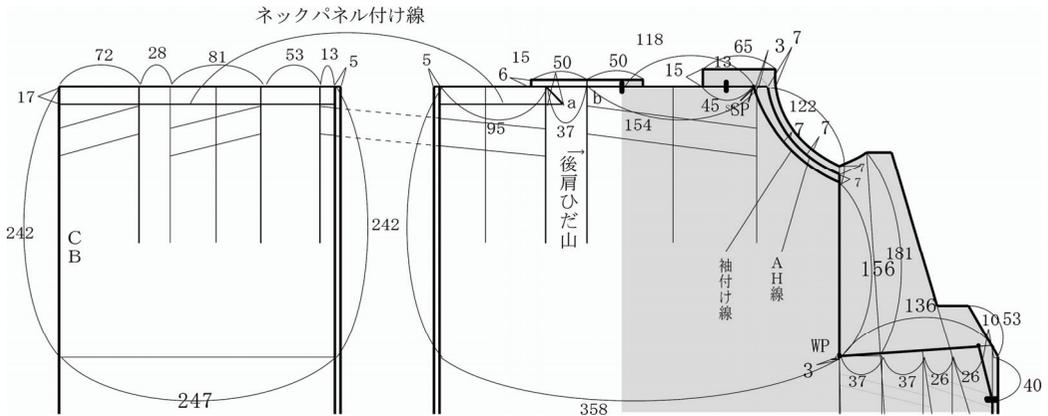
●身ごろ肩部分と袖付けの形状と構造

ここは、ロブ・ヴォラントの衣服構造において最も重要で特徴的な部分である。この部分の巧妙で精緻な組み立て方こそが、このロブのスタイルを決める要となっている。そしてまた、この部分の衣服構造は、後に続くロブ・ア・ラ・フランセーズなどのロココ期ロブへと受け継がれていることが見られる。

以下にその形状と構造を示す。

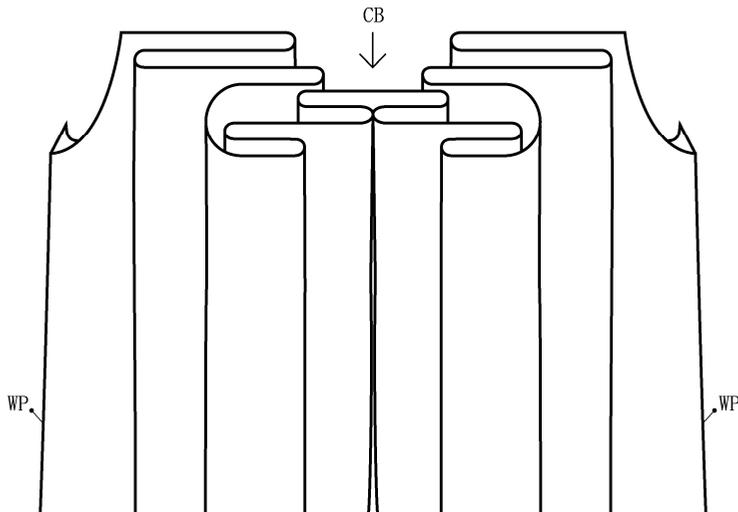
- ・背面プリーツの寸法とたたみ方

図 (3) - 1



たたみ方

図 (3) - 2



・肩部分

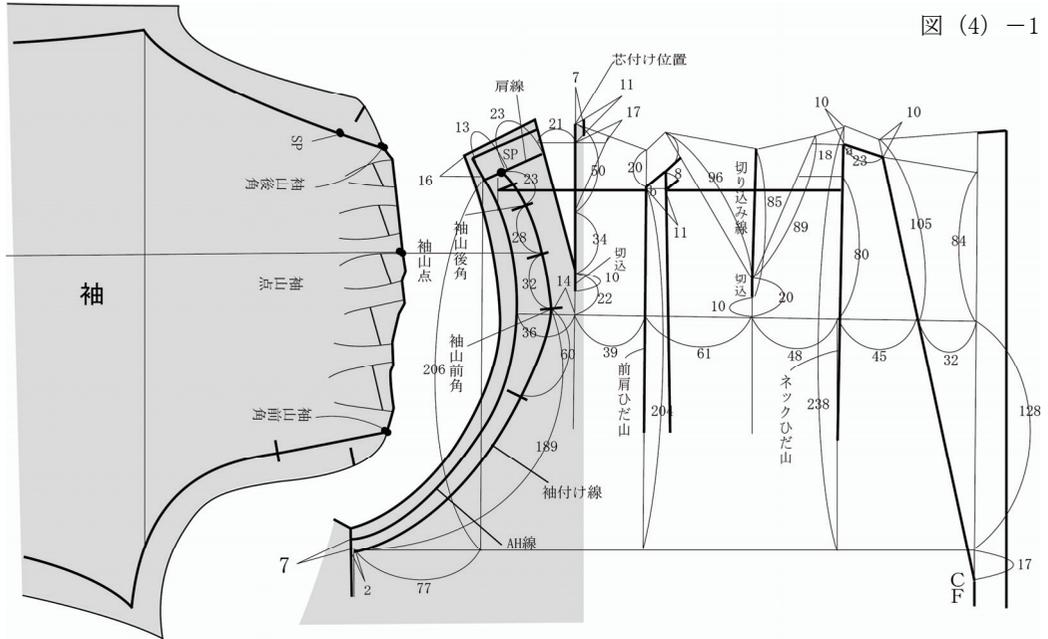


図 (4) - 1

前肩部分のひだのたたみ方

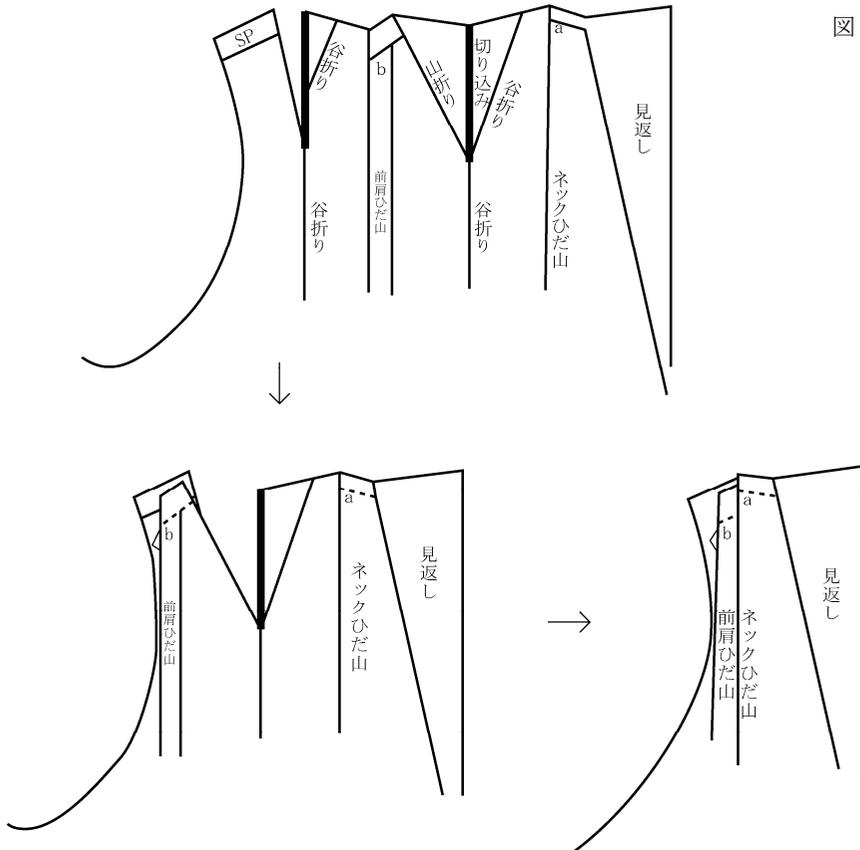
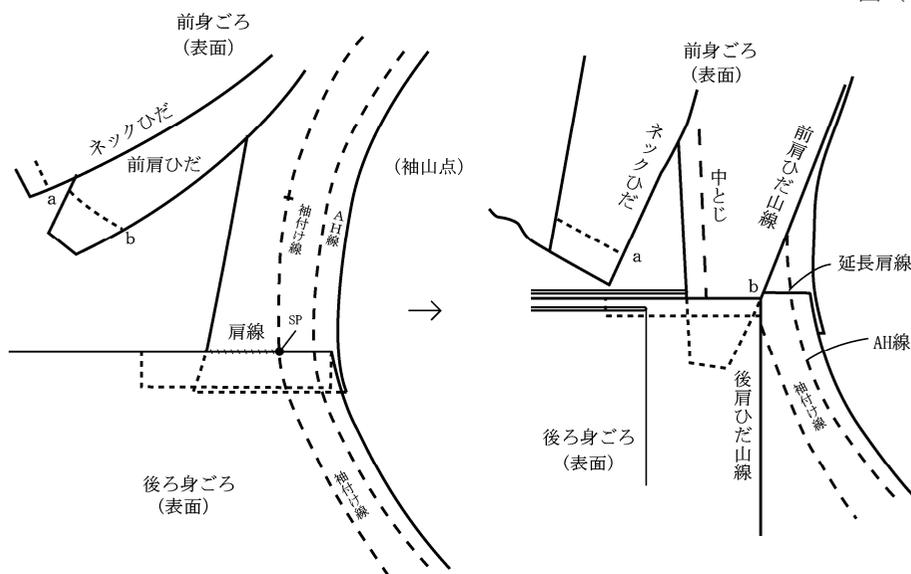


図 (4) - 2

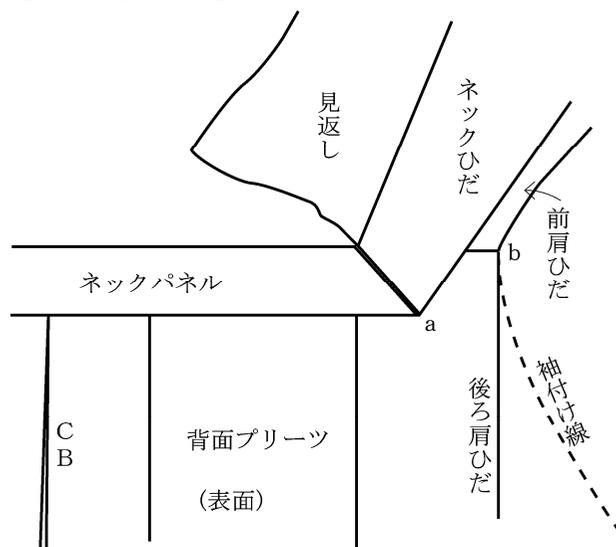
- ・前後肩部分の縫合 (後述の、Ⅲ 前後身ごろの接合とスタイル形成の項目を参照)

図 (5) -1



- ・ネックパネルとネックひだの縫合

図 (5) -2



- ・袖付けの工夫

身ごろの AH に合わせて袖を付けることはしていない。袖は、袖山に5本のタックを設けて上腕肩部のふくらみを出しているが、タック部分に縫い代を付けて身ごろに縫い合わす時、布地が厚く手縫いで付けるのは困難であるから、裁ち切りのまま身ごろにかがり付けることになる。そこで、袖山の付け位置が、肩に被さるひだの奥に隠れるように、AH 線を越えてネック寄りの位置に持って行く。身ごろ AH は、この部分で、袖山タックを内側から支える肩パッドのような役目をする。

## 4. 縫製方法の考察

### (1) 裁断の方法

前後身ごろとまちは、全体的に柄合わせが行われている。しかし、布地には織りむらがあり、模様一単位の寸法は均一でなく、縦方向には最大で10mm程の差が見られる箇所がある。また、裁断時に柄合わせ位置がずれたと思われる部位もあり、柄合わせはきっちりしたものではない。裁断の方法については、以下のようにして推察した。

#### I、柄合わせとパターン配列（マーキング）の推定

##### i 裁断時の形状と寸法を推定し、裁断時パターンを作成する

- ・上記のパターン図を基に、実測形状を参考に、裁断当初の縫い代を推定し記入した。

実測形状には各部位の左右差が見られたが、裁断時には左右同形であったと思われる。柄合わせを行った部位では、左右の寸法間違いが生じることは少ないと思われるからである。（耳線に直角方向の横線は、模様を目安に裁断したとも見られるので、模様むらによる丈の寸法差が生じる可能性はある。）

- ・このパターンには、寸法測定時に設定した基点（A）と想定WLなどの基準線を用いた。

##### ii ロープ各部位における布地の模様位置および各部位同士の縫合における模様の合わせ方を観察し、部位の中で目立つ「花びら上端」の位置を基準線からの距離で測定し、裁断時パターンに記入した。まちについては、身ごろと接するすそ線からの距離を測定した。

##### iii ・実測寸法を基にしたパターンの寸寸法と、均一模様と見做してそれを単位として割り出した寸寸法との差は、着用による布地の部分的伸びや測定誤差および布地にもともとある模様むらにより生じる。（前後身ごろの寸寸法に約5mm見られた）模様を単位とした寸法に合わせて修正した。

- ・後まちは、左右で模様位置の差が9mm見られたが、接合する後身ごろにおける模様位置に合わせて修正した。

##### iv 修正した裁断時パターンの左右両方に、柄合わせ線と印を記入した。

柄合わせをおこなっていない部位については、左右それぞれの目立つ模様の位置を、裁断時パターン上に記入した。

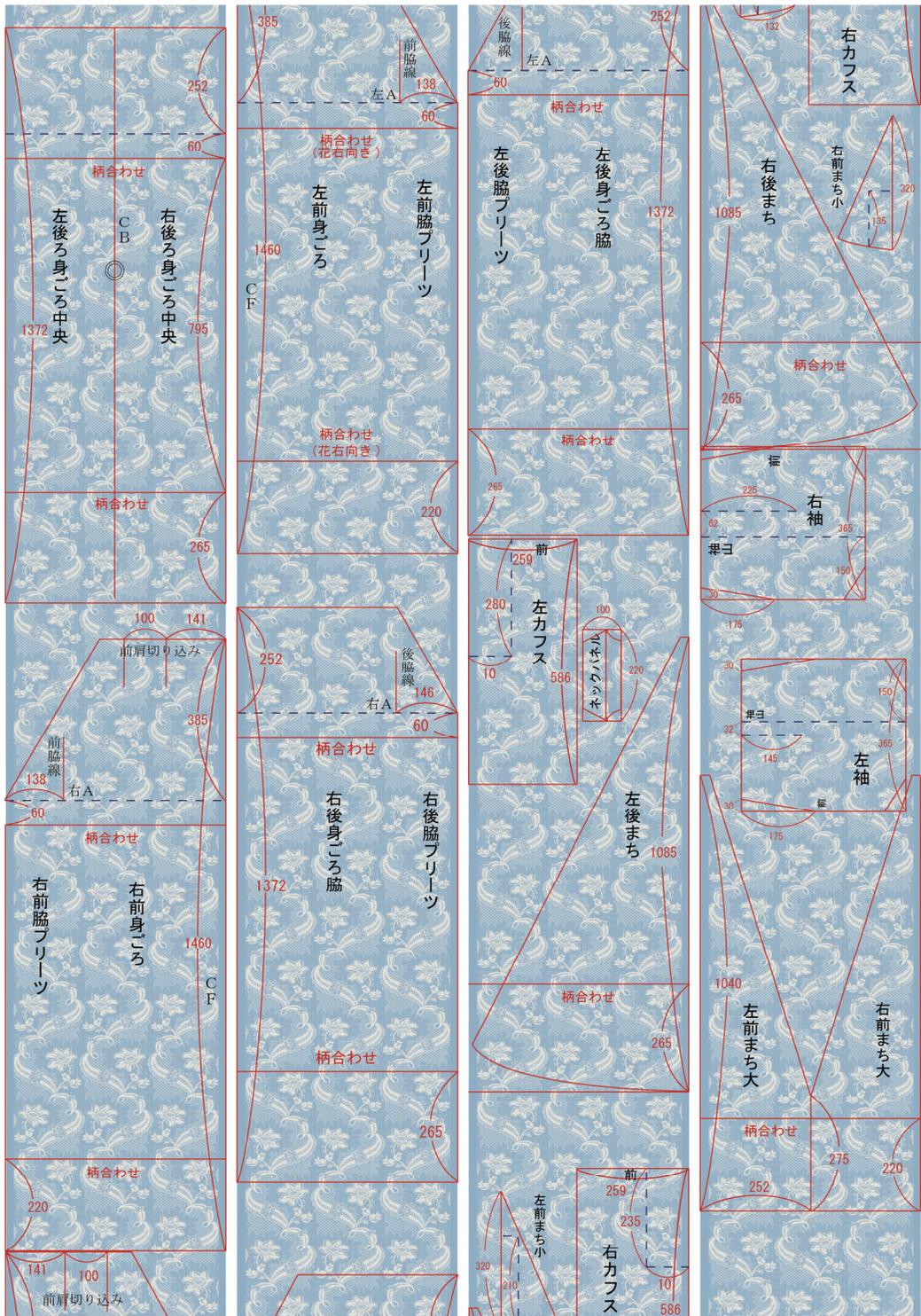
##### iv 復元した模様を転写した紙上に、裁断時パターンを配列しマーキングを試みた。

念のため左右実測形状図も当てはめてみた。

#### II、裁断時の各部位の形状と柄合わせなどの裁断方法

次の図に示すような結果が得られた。

図 (6)



要尺 12190mm 布幅 505mm (単位 mm)



- ・柄合わせと布地の節約の両方を考慮しており、柄合わせに不揃いが生じたのは、布地の節約を優先したせいではと言えない。
- ・型紙は作らず、布地に直に裁断線を描き入れたと思われる。(糸印ししたと思われる)  
理由としては、次のことが考えられる。
  - ・裁断時の各部位の形状は直線的で単純である。(布地の再使用を考え、縫い代は出来るだけ多く残そうとしているため。)
  - ・布幅を一杯に使った形状に構成しているせいもあり、縫合のための印つけは殆ど行っていない。(ローブ左右で仕上がり形状が異なるが、裁断時にパターンを使えば避けられた筈の部分がある。)
  - ・身ごろは大きく丈が長いため、型紙を作るには大きい紙が何枚も必要となる。
- ・前まち小は、もともと布地の節約のために作成した部位であるが、布地の余った場所が無造作に切り取っており、左右差は裁断時に生じている。カフス幅にも左右差があるが、布地の節約のために生じたものでは無いことが分かった。これは、寸法間違いと見る。
- ・後まちにおいて修正した左右差9mmは、マーキングには影響しなかった。これは、裁断線を描く時、模様位置がずれたものと考えられる。
- ・袖およびカフスは、どちらも左右でほぼ中央位置に「花」が来るように配置してはいるが、きっちりとした柄合わせを行っていない。しかし、右袖と右カフスの模様に対称に左袖と左カフスの柄合わせをきっちり行っても布地の総使用量が変わらないマーキングができることが分かった。

## (2) スタイル形成と縫合の工程

布地裁断後、どのようにしてスタイル形成がなされていったのかを、実測形状の左右差と復元製作における縫合時の観察をもとに推察する。

(縫い方の詳細は、「ローブ・ヴォラントの復元製作」<sup>7)</sup>『復元縫製の要点』に記している。)

### I. 後身ごろの形成

- ① 後身ごろ脇端線に、後まちを縫い付ける。
- ② 後身ごろ脇に芯地を据える。
- ③ 脇プリーツを芯地と一緒にたたみ、胴部脇線下(WP)で止め縫いする。  
(プリーツのたたみ寸法の印つけは行っていない。2本のひだの寸法とたたみ角度が右左で異なる。左右まちの身ごろへの付け位置が異なること、およびスラッシュあき口が前後で合わない、まちの形状も変わってくる。これらは、まちを最初に取り付けてしまったこと、および脇プリーツのたたみ方と縫い止め方がそれぞれ異なることに起因する。前身ごろ脇についても同じであり、4箇所の脇プリーツと4枚のまち部の寸法差をもたらす主因となった。)
- ④ 後身ごろ中央布を縫い合わせる。
- ⑤ 背面プリーツ8本をたたむ。

(プリーツのたたみ寸法の印つけは行っていないと思われる。表面から見た左右4本づつのひだの大きさには左右差は少ないが、ひだ奥の寸法は異なっており、中央の位置もずれている。または、前後肩部を接合する時、プリーツをとじた糸が解け、その後、目分量でたたみ直したとも思われる。)

## II. 前身ごろの形成

- ① ①②③の工程は後身ごろに同じ。
- ② 肩部のひだ2本を仮りたたみする。図(4)－2 参照

## III. 前後身ごろの接合とスタイル形成

前後胴部脇線を仮留めし、着用状態でピンワークする。

### 1. 前後肩線の確定 図(5)－1 参照

- ① 背面プリーツの後肩ひだを除け、前後身ごろのつながる位置(肩線)を決める。  
この時、前身ごろ肩部分の切り込みを大きくしたり、余分な布を切り落とししたりする。
- ② 前肩線にあたる布端(芯地も一緒に)を、後肩線縫い代(背面プリーツ上端を縫い代として折り込む)の表地と芯地の間に挟み込み肩線を決めてピンを打つ。後に、縦まつりとじする。

### 2. 前後肩ひだの接合 図(5)－1 参照

- ① 後肩ひだをもとの位置に戻し、その山部上端の折り込みに、前肩ひだの先端部を挟み込み、前肩ひだが、形よく、また、肩線上にも一直線に釣り合いよく被さる位置を探して仮留めする。後に、縦まつりとじする。
- ② 肩ひだの縫合線と肩線を仮留めし一旦固定する。  
(左肩部は、肩ひだ縫合線と肩線とが上下に並ばないで少しずれている。ピンワークまたは縫合の不具合、または、仮留めをしなかったため、次の作業がし難くなった。)

### 3. 胴部脇線

- ① 腕ぐり線(AH線)を決めて、縫い代を見込んで布を切り落とす。
- ② 胴部脇縫合線は、後に、巻きかがり接ぎする。  
(右左16mmの差は、印し間違いか、着用状態で決めたのか、縫合時の間違いかは不明)
- ③ 縫い代は芯地も一緒に、脇プリーツを延長する形で斜めにたたみながら、AH線まで持つて行き、芯地でくるむように整える。縫い代はできるだけ残す。

4. 前後まち布を縫い代まつり地縫い(印し付けが無くても可能)で接合する。

5. スラッシュあき口と芯地の始末をする。(毛抜きまつり縫い)

## IV. ネックラインの形成

1. ネックパネル布の準備と背面プリーツの固定
2. ネックパネルとネックひだの取り付け

着用状態でピンワークする。

(ネックパネル、ネックひだともに右左で形状が異なるのは、背面プリーツのたたみ方に合わせて取り付けしなければならず、同時に、パネルは、ネックひだとも合わせる必要があるためである。)

- ① ネックパネルを、背面プリーツに挟み被せる。ネックパネルの斜線部の縫い代を折り込み、形を整えピンで仮留めする。
- ② 前身ごろネックひだの先端部を縫い代として折り付けてみて、それがネックパネルの斜線にぴったりと合う形、尚且つ、肩ひだの縫合線およびその下にある肩線との釣り合いがよい形で折り付け、ネックパネルと突き合わせに置いて仮留めする。図(5)-2 参照
- ③ パネルとひだを渡しまつりなどで縫い付ける。

## V. 袖の形成と袖付け

### 1、袖の準備

- ① 袖に、芯地を据え、袖山点を目安に袖山タックをたたみ固定する。
  - ② 袖下線を仮止めする。
- 2、身ごろを着用状態にして袖を着せ、ピンワークする。何度か行ったと思われる。
- ① 袖と身ごろにおける袖付け位置線を決めてピンを打つ。(ここで身ごろ側の袖山点、SP《肩線との交点》、袖下線と脇線の接点、などが決まる。左右でそれらの位置が異なっており、左袖はかなり前寄りに付いている。体形に合わせたとも思われるが、左身ごろ側につまみを入れて、無理な縫い付けをしている。)

袖と身ごろ(どちらも芯地も一緒に)の合わせ方は、下半分(SP~袖下線と脇線の接点~前袖付け線の下部)は中表に合わせ、袖山タックなど上半分は、袖が身ごろに被るように合わせる。

- ② 袖口線は、袖口(肘あたり)の形状を考えて形付け、表地と芯地の折り代を毛抜き合わせに折り付けておく。(左袖は前寄りに付けてしまったため、左袖口の肘にあたる位置は後ろへ寄ってしまった。)

### 3、袖縫いと袖付け縫い、および袖付け後の縫い代の始末

## VI. カフスの形成とカフス付け

### 1、カフスの形成

- ① カフス布に、芯2枚を据え、前後のタックをたたみ、中とじして形を固定する。
- ② カフス回り線上下の折り代をまつり縫いで留め付ける。
- ③ 前後のタックを縦まつりとじして輪状にする。

### 2、カフス付け

- ① 着用状態で、袖にカフスをピンで取り付け、カフス付け線を印しする。(ここでカフス付け止り、合印が決まる。袖下線とカフスのタック継ぎ線は合っていない。左袖はその傾きに

合わせてカフスも傾くことを避けている。)

- ② 肘を曲げた時の内側に当たる部分は、袖口と合わせ整え、さらに細い棒状に縫いとじて固定する。
- ③ なみ縫いとかがり縫いで袖に取り付ける。

## Ⅶ. 前中心部とストマッカー用の芯の取り付け

### 1、前ネックラインの形成

前ネックラインを形成する見返し部分を、ネックひだをくるむように内側に AH 線まで折りつけて整える。その後、まつり縫いで留め付ける。

### 2、CF の始末と芯付け

- ① 前身ごろ CF の裏面に、前中心芯地をまつり付けておく。
  - ② CF 線折り代を折り付け、まつりと主には押さえじつけ縫いで留める。
- ### 3、前身ごろ付属芯を前身ごろ芯に取り付ける。

## Ⅷ. すそ上げと身ごろ芯によるスタイル形成

着用状態でピンワークする。

- 1、前身ごろのすそ上げをする。CF 線の丈が決まる。(左 CF の方が短い。左袖が前寄りに付いたためと思われる。)

その後、全すそ線の折り代を三つ折りし、まつり縫いで始末する。

\*前身ごろのすそ折り代は他の部分より大きくなったので、CF に近づく程広い折り幅にして対応する。(切り揃えないで残している。)

### 2、前後身ごろ芯の始末

- ① 前身ごろ芯の端線が、表地に添って肩から自然に下垂するあたりの位置に、芯端線を表前身ごろに留める。後に、押さえじつけ縫いで留める。
- ② 後身ごろ芯は、端線を CB 寄りに引き寄せて、芯すそから上方に斜めに切り落とし、その斜線が下垂する位置に、表後身ごろに留め、押さえじつけ縫いする。

\*身ごろ芯は、胴部脇縫目の下方では、前後まちの脇縫目線まで引き寄せられて留められている。身ごろ芯は、下部は表地から遊離しており、背面プリーツや脇プリーツが浮き出るようになる。スタイル形成に果たす芯地の役割も見落とすことができない。

身ごろ芯は、その後、胴体部にぴったりと添う形状に変化していくが、その兆しがここに見られる。

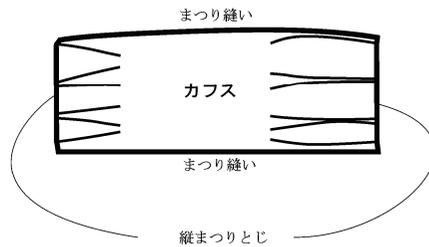
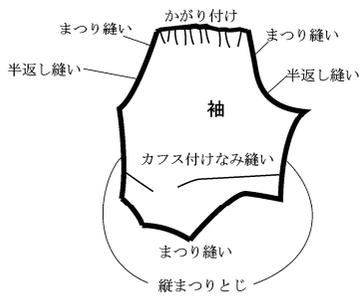
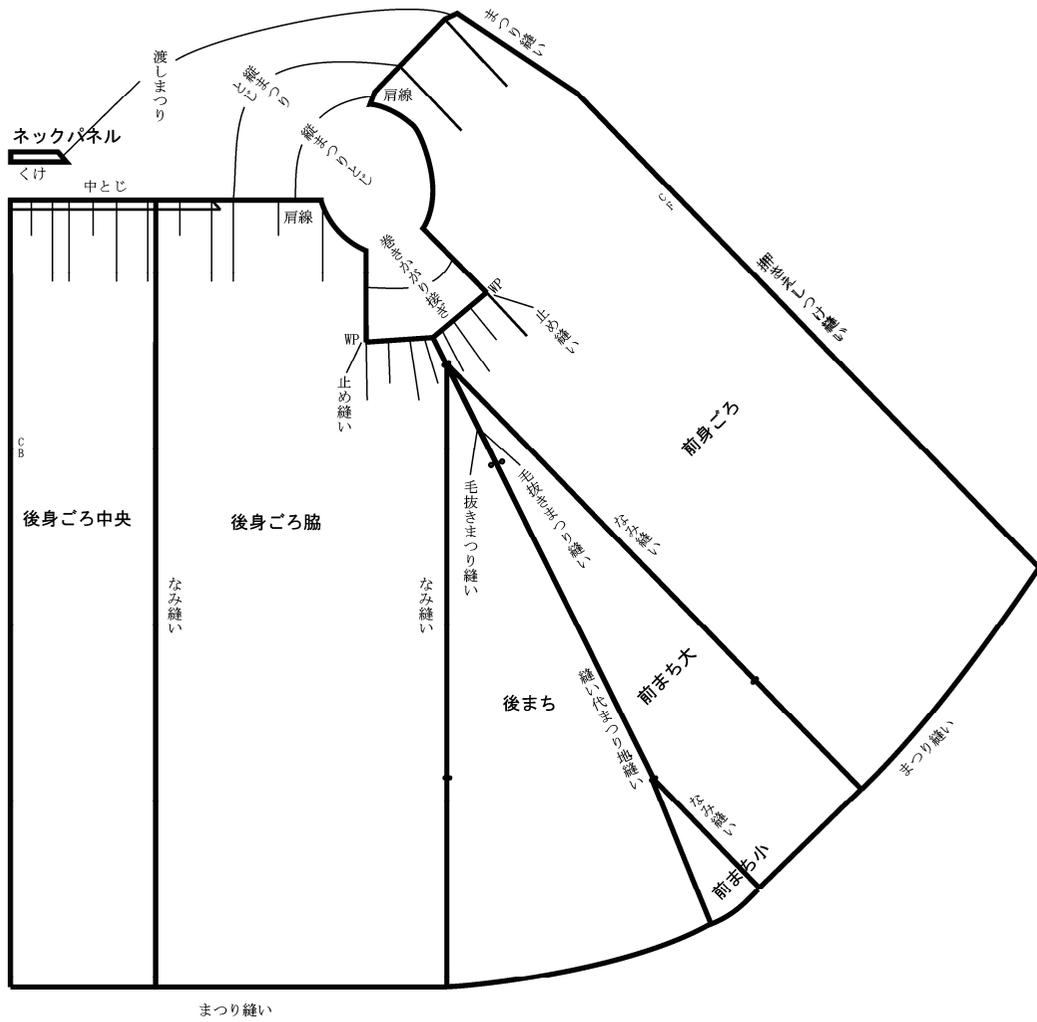
## (3) 縫い技法

○縫い技法と用いている部位

ローブ各部位の縫合線と縫い代や折り代の始末縫目を観察し、試し縫いを行って、用いられている縫い技法を明らかにした。

以下に、表布各部位に用いられている縫い技法を示す。

図 (7)



## ○縫い技法とその特徴

- ・地縫いにおいて、現代においても一般的に用いられるなみ縫い、半返し縫い、以外の技法を、次のように名付けた。また、その技法の利点を考察した。

「巻きかがり接ぎ」—— 縫合線にそって縫い代を折り付け、両方の折り山を突き合わせ、両方の山を極く小さくつまんで細かく巻くようにかがる。

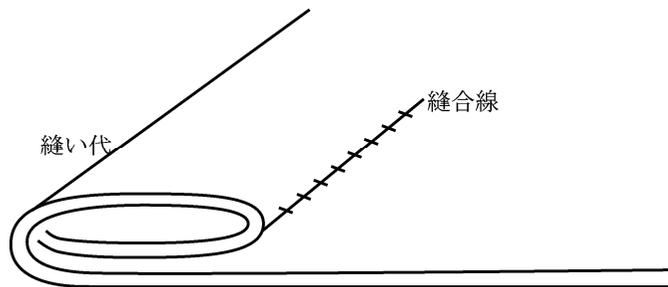
胴部脇縫いでは、先に地縫いすると、前後身ごろがつながって大きな布になり、脇ブリーツの形付けと縫い代や芯地の折りたたみがし難くなる。分業もし難くなるのが避けられる。

「縦まつりとじ」—— 片方の縫い代を折り付け、折り山をもう一方の縫合線上に合わせ被せる。折り山線を縦まつりすることによって縫い合わす。

布を筒状に形成する場合など、先ず形状を考えてピン打ちし、その状態のまま縫い合わすことができる。芯地が付いている場合は、内側で表地に添わせて整え、一緒に縫い付ける。

「縫い代まつり地縫い」—— 縫い代の始末と地縫いを同時におこなう方法。中表に合わせた縫い代を2枚一緒に三つ折りし、折り山を縫合位置に合わせ、折り山脈をまつると同時に縫い合わす。直線縫合であれば、印しが無くても縫合できる。縫い時間の節約にもなり、布を再利用する時、解き易いなどの利点もある。

図 (8)



- ・縫い代や折り代の始末において、現代においても一般的に用いられる、まつり、かがり、以外の技法を次のように名付けた。

「毛抜きまつり縫い」—— 表地と芯地の折り代を毛抜き縫いする場合、芯地側を2mm控えて突き合わせに折り、芯地側からまつり縫いで毛抜き縫いする。表地表面からはなみ縫いしているように見え、芯地は全く見えない。

「押さえしつけ縫い」—— 表面（外面）には小さい針目が出るように、押さえしつけするように留め付ける。まつり縫いするより簡単で手間がかからないが、内側には大きく縫い糸が見える。

## ○芯地の始末縫い

- ・表地に留め付ける部分（大部分は表地と一体となって縫合される）は、押さえしつけ縫いで、表に見える針目を小さくして縫い付ける。または、裁ち切りのままにしておく。
- ・芯地同士を始末する部分は、まつり、かがり、を用いている。

## まとめ

ローブ・ヴォラント（1730年前後・フランス製）の復元製作を行い、その衣服構造と縫製の方法、即ち、このローブのスタイル形成の仕方を明らかにした。

このローブの優雅なスタイルは、前面と背面のプリーツを肩部でつないで同時にネックラインをも形成する、その組み立て構造によって作られる。ネックパネルを含む身ごろ肩部分と袖付けの構造とその工夫は、非常に巧みで均衡の取れたものであった。そして、縫合され一体となって造形の妙を示すこの部分の衣服構造は、やがて開花するロココ期ローブの土台となったと言えるのである。

しかし、縫い上げられたローブは、左右で形状がかなり異なり、布模様の位置も不揃いである。構造の複雑さと縫い代を縫い込んで残す構成法であることによる縫い難さもあるが、決して、整った仕上がり形体を示すとは言えないのである。これは、スタイルの構想を人体上に表現する過程、つまり、着用状態での布の形付け及びその印しを固定し縫合する過程での不具合が主因となって生じたものであった。現代に言う「ドレーピング法」のようなスタイル形成後のパターン作成が、まだ行われていなかったことを示している。また、服作りには、仕立て職人の高い技術力が欠かせないのであるが、当ローブでは、ピンワークや縫い合わせの技術面で、左側に不具合が多く見られた。また、同じ部位の中で、用いる縫い技法が異なっていたり、縫い代の倒し方などの始末法も一定していなかった。未熟な職人を含めての手分けしての共同作業であったことが窺える。

一方で、手縫いの技法それ自体は、よく工夫されていた。ピンワークの形状を固定し易い縫い方や、縫い時間の節約と布を再利用する時の解き易さを考えた簡便な縫い方が考案されていた。また、用いる縫い技法とその運針縫目の大きさについては、着用した時にローブにかかる負荷や摩擦などを考慮した決め方がなされていた。他方で、専ら作業の簡便さを優先しつつもローブ布表面からの見た目も気にかけて、両者の折合いをつけての縫い方が選ばれていた。

人々がこのローブを愛でた訳は、布模様の合わせ方や縫製の仕方にあっただけではなく、正に衣服構造そのものにあっただけである。

この度、ローブ・ヴォラントの復元と研究において、神戸ファッション美術館を始め多くの方々から御協力いただきました。復元製作には、本学被服学科・復元研究班の大山弘美先生、杉本エリカさん、中島ひろ子さんが熱心に取り組んで下さいました。ここに、厚く感謝の意を表します。本研究の共同執筆者の村田仁代教授は、復元研究に尽力されながら、原稿の完成を見ず、平成18年3月、逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

また、本研究は大阪樟蔭女子大学・平成 18 年度特別研究助成によるものです。

### 注および参考文献

- 1) ローブ・ヴォラントを「上半身はフィットした形状でありながら背面にプリーツを持つ」ローブと見て、1770 年頃までのローブを含めている場合がある。(小原ヤス子、他：18 世紀の女子衣裳 Robe Volante に対する考察、共立女子大学家政学部紀要 (1978))
  - 2) Norah Waugh : The Cut of Women' s Clothes 1660-1930, Theatre Art Books/Methuen New York(1987 版)
  - 3) 複製は、実物測定など実際に手に取って観察しながら製作されたものではなかった。(山本昌子、他：縁飾り、裾飾りのついた 18 世紀のドレス—複製による考察—、夙川学院短期大学研究(1989))
  - 4) 前出 Norah Waugh : Diagram XI
  - 5) Janet Arnold : Patterns of Fashion 1 ,c.1660-1860,Mcmillan Publishers Ltd.London (1977 版)p.20
  - 6) フランソワ・ブーシェ：西洋服装史—先史から現代まで—、文化出版局 (1973) p 294
  - 7) 大阪樟蔭女子大学・被服学科・復元研究班：ローブ・ヴォラントの復元製作 (2007.3)
- 
- ・京都服飾文化研究財団：華麗な革命—ロココと新古典の衣裳展(1989)
  - ・丹野 郁：西洋服飾史、東京堂出版(2003)
  - ・文化服装学院編：西洋服装史、文化学園教科書出版部(2002)
  - ・朝日新聞社編：朝日美術鑑賞口座 5、18 世紀ロココ絵画(1992)
  - ・JIS L 0 1 1 0 : 2 0 0 1 「衣料パターンの表示記号」
  - ・JIS L 0 1 1 2 : 2 0 0 3 「衣料の部分・寸法用語」
  - ・JIS L 0 1 2 2 : 2 0 0 3 「縫製用語」